
ヤンデレ少女でドン！

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ少女でドン！

【Nコード】

N4814Z

【作者名】

一期 つかさ

【あらすじ】

それは突然だった！ 幼馴染みのハーフでしかもオタクな変態少女、川崎ジェシカが「あんた変態女にストーキングされてるよ！」と俺に報告してきた！ その日から、ヤンデレ少女の恐怖が俺に襲いかかる！ ヤンデレ以外にも変な女の子がたくさん！（ハールム目指しつつヤンデレ展開目指します）。

第0話 キャラクター紹介！（前書き）

話の展開とかはあんまり気にしない方がいいです。

第0話 キャラクター紹介！

一般人

・那覇翔なは しょう（15）

「ヤンデレでドン！」の主人公。中3。それぞれ、相手によって口調を変えるめんどくさい性格。
一番身近な幼馴染み・ジェシカには「ッス」と下から。
洋画好きで、邦画が苦手。

・川崎ジェシカかわさき（15）

本人曰く「ベラルーシとウズベキスタンのハーフ」。川崎三姉妹の次女。

日本のアニメ（特に深夜アニメ）とアニソンをこよなく愛するオタク少女。

パソコン部の部長で、部活内でのあだ名は「変態」や「痴女」。学校以外での服装は、大概コスプレ。

翔と同じで洋画が大好きで、邦画を軽視している。

・川崎雪ゆき（13）

本人曰く「アゼルバイジャンとスウェーデンのハーフ」。川崎三姉妹の三女。

オデコが広いことを気にしている中学1年生。

笑いのツボが一般とズレていて、例えば、机に置いてある他人の教科書の向きを逆にする、など、シニールにシニールを重ねた事に面白さを見出だしている。

他にも、「謎の」や「〜になっちゃうよ!」という言葉面白がつてる。

自分だけ純日本名であることに疑問を感じてる。

・川崎 レベッカ (17)

本人曰く、「インドとアンディグアバーブーダのハーフ」。川崎三姉妹の長女。

雑でめんどくさがりだが、18禁アダルトサイトには入らなかったり、無駄にきつちりしてる。

男っぽい口調だが、運動神経は無い。

親に反発してるが、たまたま翔の家で映画「A・I・」を観て、感銘を受け、親孝行をするようになる。

・浜松 夏海 (15)

一人称は「浜松」。ドジっ子で毒舌家。しかも説教癖がある。キレると騒ぎ出す。

その割りには、弁当にドリアンなどを持ってきたり、ボケたがる癖があるが、すぐ緊張して、口ごもってしまい、いつも空回り。

・函館 冷 (15)

クリスチャン。ダイエット中。聖書を常に持ち歩いてるが、実は「バベルの塔」までしか読んでない。

弁当を食べる前にお祈りを欠かさない。しかし、お祈りが曖昧で一斉にツツコミを受ける。

神経質で、いろいろなことに対してすぐ反応する。でもって声が大きく、迷惑がられる。

・三浦 南海 (15)

転校生。金髪でケバくて鋭い目をしてるが、それは前の学校でお人好しキャラで失敗したため、無理してキャラを作っているだけ。

優しさが滲み出て、たまに人が良いことがバレそうになる。

ヤンデレ様

1、木更津 きやろし かずさ（17）

翔の家の近所に住む無口な高校生。

2、宮崎 みやざき 千秋 ちあき（23）

小学校の新任教師。翔の歳の離れた幼馴染み。

3、長崎 ながさき 遠依 とおい（13）

翔の隣の家に住む中学生。排他的で、翔以外の友達を作らない。

他にもいるよ

第1話 転校生モンスターと転校生！

「翔ちゃん、聞いた！？」

ジェシカは教室のドアを開けるや否や、目を輝かせた。真っ先に視線をやったのは、まだ生徒がまばらな教室の、片隅の席でポツンと座って窓の外を眺めていた、翔^{しょう}だった。

翔はゆつくりと体を捻り、ジェシカと目を合わせた。

空いてた席から適当に持ち出した椅子に座り、その席の生徒がたじろぐのもお構い無しに、ジェシカは翔に顔を近づけた。その顔は莞爾という言葉以外思い当たらないぐらいに綻んでいた。

「ねえ！ 聞いた！？」

「え？ どうしたんすか？ なんの話ツスか？」

翔はあまりの迫力と唐突に「聞いた！？」と訊かれたことに混乱し、目を丸くした。顔が近いことよりも先に、ジェシカの異常なまでのテンションの高さが気になった。

オレンジがかった髪は首元まで伸びていて、瞳は青く、他人よりも彫りの深い顔は、日本人ではないことは明々白々だ。肌は白く透明感があり、頬は、リンゴ病の発赤を彷彿とさせるほど赤かった。

顔が近いのを恥ずかしがることなく、嬉しそうに、体を揺らす姿は、少しでも衝撃を与えれば膨れ上がった風船さながら大きな音を立てて破裂しそうだった。

「とにかく、大変なの！」

ジェシカはまた、叫んだ。語調は強く、噛み締めるように両手を握りしめる。

翔は、自らの閉口具合をフィルターにかけることなく、そのまま表情にし、周囲に一瞥^{いちべつ}を与えた。ジェシカに席を取られた生徒がどこか物寂しげに犯人の後ろ姿を眺めるだけだった。

「何が大変なのか、言ってくれないと、困りますよジェシカさん」

視線をジェシカに戻すと、やはりジェシカの顔が近い。今度はそのことに驚いて、反射的に身体が仰け反る。

「何がって、転校生よ転校生！ 転校生！」

ジェシカは、嬉しそうに「転校生」という言葉を繰り返し、一人で跳び跳ね、盛り上がる。

ひとまず顔が離れたことに安心し、体勢を元に戻し息を吐く。

体育の授業があるわけでも、運動部に所属しているわけでもないのに、ひとえに「めんどくさいから」という理由でジェシカは普段からジャージ上下を着ていて、彼女が制服姿の時は、ほとんどが集会など、制服を強制された時だけだ。

ふと、ジェシカが小さく「ドンビドンドン」と口ずさんでるのが聞こえた。

それがクッキーモンスターの真似だとはすぐにわかった。

「クッキーモンスターって、自分を抑え込むのが苦手なだけで、案外、まともなキャラなんだよね。それに可愛いし」数年前にジェシカが淡々と語っていたのを思い出した。「クッキーとか食べ物を目の前にしたら、興奮してすぐに口に入れちゃう」

今の「転校生」に興奮してはしゃぐジェシカが、食べ物の前にした、もしくは食い荒らしているクッキーモンスターに見えて少し頬が緩んだ。

同時に、転校生がジェシカの欲を掻き立てたのか？ と可笑しくもなった。

「女の子だって！」

ジェシカがまた、翔に顔を近づけた。

「女の子に興奮してるんスカ？」思わず声を洩らした。

「私がレズなら、翔にこんなに顔を近づけたりしない。気色悪い」

ジェシカは目を細めた。

「どんな子が来ると思う？」

表情を元の澀刺としたものに戻すと、ジェシカの吐息がはあっと翔に吹きかかる。

恥ずかしさからなのか息を止めてしまっ。目を他所に向け、「えー
っと」と考え込むフリをする。

「三浦 みつら 南海 みなみ！」

フライング気味にジェシカが言う。明らかに翔の答えなど待っていない風だった。

翔の脳裏では、まだ「どんな子が来ると思う？」という言葉が反芻 はんすう していた。合いの手を打つように、合間合間に「適当な女」という言葉も繰り返された。

「さつき会ったんだ。握手してきた！」ジェシカは自慢気に右手を翔に見せた。「でも、そんな良い子じゃないね」。ジェシカの表情が一瞬だけ曇った。「だって、私に『はははははHeelloo!』って言うんだよ。すごい焦ってた！」

「仕方ないっスよ。それはジェシカさんが外国人の顔をしてるから」とジェシカはひどく落胆した様子で、「はぁー」っと溜め息を吐いて翔の机に顔を伏せる。

ひょこんと顔だけ上げると、「だからハーフって辛いんだよねー」と眉をひそめた。

「ジェシカさんって、どことどのハーフでしたっけ？」翔は半笑いで言った。

ジェシカは上目で翔を見ると、迷うことなく言った。

「ベラルーシとウズベキスタン」

第2話　うるさいですよ！

「三浦南海、よろしく」南海は声を張った。

啞然とする生徒たちの視線の中を恥ずかしがることなくずかずか、堂々と歩き、空いていた席へ移動した。

黒板には大きな字でしっかり「三浦南海！」と書かれていた。

「あの……」

担任の女教師が声を掛けたのは、すでに席に座ってからだった。

「なんですか？」

鋭い視線と刺すような声に、担任は一瞬同様する。

長い髪は金色に染められていて、眉も剃られ、あからさまな不良生徒だった。

「み、三浦さんの席はそこじゃなくて、こっち」担任は離れた別の席を指差した。「そこは、飯田君の席、今日、風で休みなの」

南海は指差された席に目をやる。その後で周囲をぐるりと見回す。相変わらず生徒は目を丸くしている。

南海の額には汗が滲んでいて、状況から考えて、恥ずかしさからの明らかに冷や汗だ。

何の意地なのか、南海は担任をキツと睨んだ。すぐに、机の上に置いた鞆を持ち、席を移った。

南海の席は、ジェシカの隣だった。

「よろしく、私、ジェシカ、さつき会ったよね」

ジェシカは怯むことなく優しく声をかけた。

ジェシカの脳裏には、声をかけたことで跳び跳ねて驚いた南海の姿が浮かんでいた。

「覚えてない」南海は短く、言った。

「ううん、覚えてるよ。だってさつき会ったもん。握手だってしたよ」

ジェシカは右手を突き出して見せつける。

南海は煩わしそうに横目でそれを見やると、無視して視線を前に向ける。

「みつつって、映画とか観る？ 私は、よく観るよ。3D映画はIMAXでしか観たことないんだけど、普通の劇場だとうなの？」
「すごく気になるんだよね」

無視という概念は無いと言わんばかりにジェシカは続けた。

教壇の上では担任が話し込んでいたが、南海はそれを聞く気などさらさら無かったが、ジェシカの方には絶対に視線を向けないと、た

った今、決めた。

しかし、いつの間にか自分のことを「みっち」と呼んでいたことを、鬱陶しさが追い越し、頭の周りをぐるぐると回って集中力をかき乱した。

「邦画ってどう？ 私はあんまり好きじゃないんだよねえ。なんかこう」

得意気に語るジェシカは、気がつくやうに南海と目が合っていた。

「うるさいですけど！」南海はまた、声を張った。

それと同時に別の生徒が、「うるさい！」と叫んで、そつちに視線がいった。

担任の声も止まり、生徒の視線が声の方へ向く。

それを辿ると、立ち上がり、二人の方を睨む女子生徒が、いた。この三年二組の学級委員、浜松 はままつなつみ 夏海だ。

南海も体を捻り夏海の方を見る。一見、小学生にも見える小柄な姿が目に入った。夏海は堂々と腕を組んでいた。

「誰の妹？ あの幼稚園児」南海はボソツと呟くように言った。

すると、何やら物音がした。夏海が動揺したのか椅子に足をぶつけた音だった。

「小学生ならしょっちゅう言われるけど、幼稚園児はあんたが初め

て。この擦れっ枯らしの、アスホールズベ公が！」夏海は南海に向かって中指を突き立てる。

発音良く「アスホール」と言ったことに、ジェシカは思わず吹き出してしまふ。

「浜松さん！」担任がさかさず叫ぶ。「いけません、その指。あと、言葉遣いが悪すぎます。もっと優しく声をかけてください」

夏海は担任の方を向くと、「アメリカとか海外なら、これが悪い意味になるかもしれないけど」中指を立てながら言い訳を始めた。「別にこれが日本人にとって罵る意味になるとは思えません！」

「とにかく謝ってください！」

担任が南海に一瞥をくれると、怒りからか、微かに震えているのが確認できた。

「じゃあわかりました」夏海は南海の方へ向き直った。「訂正します」

「訂正？」と担任が言うのより先に、夏海は思いっきり右手を突き上げてから、一気に顔の前までふり下ろした。一瞬の動作だった。

親指を下に向け、にたりと笑い「これなら日本人でもムカつくですよ？」と言った。

「どっちも一緒」ボソツとツッコんだのは、翔だった。それと重なるように「なつち性格悪いー」とジェシカが目細める。

「おとなしい金髪眉無しと、騒がしくて口が悪くてバカなチビツ子、どっちがまとも？」南海の頬が緩む。

南海と夏海のことを言ったのだろっが、自分で自分のことを「おとなしい金髪眉無し」と表現したことに生徒は驚く。

南海は何事もなかったかのように、余裕の表情で前へ向き直った。

怒りで平常心を失ったのか、夏海は顔を真っ赤にして「アイロニー！」と前屈みになりながらも、発音良く叫んだ。

「あそこまでなつちを怒らせたのは、みっちが初めてかも」ジェシカは南海に、小声で、耳打ちするように言った。「バートみたいな顔してるもん」

南海は一瞬「バード？」と思ったが、「ああ、バートね」と、何のことを言ってるのかわからないながらも、納得した。しかし、ジェシカの声に耳を傾けていたんだと気が付くと、顔を振って、頭にしがみつくジェシカを振り払った。

ふと気が付くと、ジェシカの姿が席に無かった。今のでどこかへと吹き飛んだのか、と一瞬だけ安心。だが、そんなバカな話無い、と我に返る。

喚き散らす夏海の方へ視線を向けると、ジェシカが夏海の前に立っていた。

夏海の視界にジェシカは入っていなかったため、夏海はジェシカの存在に気がつかない。

「カーワーバンガー！」

ジェシカは力強く叫ぶと、夏海の肩を両手で押さえると、「あむ！」と声を上げ、吸血鬼さながら首元にかぶり付いた。

「あん」夏海の喘ぎ声が響く。室内はシーンとする。

ジェシカは畳み掛けるように、何度も甘噛みする。

夏海は噛みつかれた回数と同じだけ喘ぎ声を上げて、気持ちよさに脱力し、とんと腰をおろす。

彼女はすっかりおとなしくなっていた。

第3話 好きな声優は？（前書き）

ヤンデレが出るのはもうちょい先になりそうです。

第3話 好きな声優は？

授業中、南海の顔がすぐれないのを、ジェシカは見落とさなかった。

「教科書、見せよつか？ 忘れたんでしょ」

ジェシカが小声で言うと、南海はムツと不機嫌そうな顔をする。図星だとは、すぐに分かった。

有無を言わず、ジェシカは机をくつつけようとする。

「あ……」喉に何かが突っ掛かったのか、南海は口を小さく開けたまま静止する。ジェシカの顔が至近距離にまでできていた。

南海はごそごそと脇にかかった鞆を漁り、手鏡を取り出すと、ジェシカには見えないように自分の顔を確認した。

化粧をしていたわけではないので、化粧が崩れたわけでもない。

ただの金髪眉無しが、鏡にうつっていた。

「そうよ……」小さく、短く、言い聞かせるように呟くと、鏡を鞆にしまい、ジェシカを睨む。

顔を少し下に向けて、上目で睨む、なんとも、わざとらしい。眉無しなだけあって、少しは怖かった。

「スーパーサイヤ人3もさ」ジェシカは全く動揺する様子などなかった。「眉毛無いよね。髪長いし、金髪だし」

「はあ？」南海は威圧するように顔を近づける。

「私女の子とキスとか、したことないけど、一度はしてみたかったんだ」

やはりジェシカは怯まなかった。それどころか、さらに顔を近づけ、南海の唇に自らの唇を重ねた。

誰かがそれに気がつき「おい！」と声を張り、二人を指差す。二人のキスは、大衆環視の中に晒された。

「何やってんスカ」冷静に言ったのは、翔だった。「ジェシカさん」

南海は、一瞬、何が起きたかわからずに、止まってしまったが、すぐに我に返って、ジェシカを押し倒す。

がしゃん、という音と「きゃあ！」という悲鳴が室内に響く。

「何やってんだ！」国語の教師が怒鳴る。

「ジェシカさんが三浦さんにキスしたら、三浦さんが嫌がってジェシカさんを押し倒したんです」翔が起き上がるうとするジェシカを指差す。

「違います」倒れた椅子を戻し、ジャージをはたいて座り直したジェシカは、ピシッと手を上げた。「みっちは確かに言いました。『今はダメ！』って。これって、後でなら良いつてことですよね？」

もちろん、南海が「今はダメ！」だなんて言ったはずはない。教室

内は呆れた空気でどんよりする。

「とにかく、今は授業中なんだから」国語の教師はチョークでジェシカと南海をさす。「授業が終わってから解決しなさい。いいですね」

ジェシカは悪びれながらも横目で南海を見る。怒りに身体を震わせる南海がいた。顔はうつ向いて、どんな表情をしているのかわからない。

ただ、この上無く不機嫌だということだけはわかった。

「ドンマイ」ジェシカは南海の肩にポンと手をおく。すかさず、南海は「うるさい！」と素早い動きでジェシカの手を払う。その目は、うつすらと潤っていた。

「そうだ今日さ、近所の高校生の女の子がいるんだけど、その子、なんか変なんだよね。先輩だけ。放課後追跡するんだ。みっちも、どう？」

ちらりとは見えたはずの涙顔をすっかり忘れた様子で、誘う。

「ジェシカちゃん」後ろの席の女子生徒がジェシカの肩を叩く。

「なあに？」ジェシカは間延びした声で反応し、身体を後ろに向ける。

いざ後ろを向かれると、女子生徒は気後れしてしまい、身体が自然と仰け反る。

ジェシカは顔を傾け、不思議そうな顔をする。女子生徒が何か言いたそうだと、振り向いた直後に察知していた。

「え、えーっと……」女子生徒は目を泳がせて、挙動不審だ。

「早く言つてよ」ジェシカは身体を揺らして急かす。「なに？なに？」

女子生徒は深呼吸すると、ジェシカの目を見る。

「アニメソングは聴きますか？ それと、三浦さんが可哀想です！」

取って付けたような、というより意味不明な言葉だと、言つたそばから思つたが、言い直す勇氣は無かつた。

「もちろん、そりゃ聴くよ！」ジェシカはにっと頬を緩める。

「三浦さんが可哀想です！」が本命だつた女子生徒にとって、期待外れの応えだつた。それも自分が悪い、と言い聞かせる。女子生徒はアニメソングに興味などなかった。

「え？ 聴くの？ アニソン」ジェシカは女子生徒の心の内は察知せず、ずかずかと踏みいるように追求する。

「え、その……」女子生徒は絵にかいたような狼狽をする。目は泳ぎ、助けを求めようと周囲を見るが、誰もこの状況に気づかない。声をかける勇氣もなければ、教師に伝えることもできなかった。

「私は、ちょっと地味って言われるけど、坂本真綾が好きだなあ。みんな、水樹奈々が好きだっていうけど」

当然、女子生徒には何の話か理解できない。

「真綾は、『プラチナ』とか『トライアングラー』とか、アニソンが注目されがちだけど、もっと掘り下げれば、いっぱいいい曲あるよ」ジェシカは構わず続ける。指を立てて得意気に語る。「例えばほら、『Ｔシャツ』とか『オレンジ色とゆびきり』とか『パイロット』とかね」

女子生徒は「は、はあ……」としか返事ができず、それよりも、自分に「好きなアニソンは？」と質問された場合のことを懸念する。

「好きな声優は？」予想は外れたが、もっと難しい質問が飛び出した。「せいゆう」と言われて一瞬、大型スーパ―のことを思い浮かべる。

「ま……」

「ま？」一瞬、脳内で「ま」で始まる声優を探したが、すぐには見付からない。

「ま、的場浩司……」

思わず、プツと吹き出したのは、ジェシカではなく、南海だった。

第3話 好きな声優は？（後書き）

作者が真綾好きなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4814z/>

ヤンデレ少女でドン！

2011年12月17日19時50分発行